

保育所・幼稚園・認定こども園等における食生活支援に関する研究 3

研究分担者 鈴木 美枝子（玉川大学教育学部乳幼児発達学科）
近藤 洋子（玉川大学教育学部教育学科）
加藤 則子（十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科）
研究協力者 仁藤 喜久子（仙台白百合女子大学人間学部人間発達学科）

研究要旨

これまでの研究で、食育活動を中心とした食生活支援を積極的に行っている保育所、幼稚園、認定こども園等を対象に、園長、栄養士、保育者等へのインタビュー調査を実施し、好事例園における特徴的な活動や共通重点事項を抽出してきた。本研究においては、これらの好事例園に子どもが在籍している保護者へのインタビュー調査も行うことで、園での食育活動を中心とした食生活支援に対して、保護者がそれをどのように受け止めているかについても併せて分析した。

保護者は日々、子どもの食に対して奮闘努力しており、それに対して園側から支援が得られることを心強く感じていた。また園での日々の食事の際の保育者や栄養士、調理員等の子どもの気持ちに寄り添った声かけや、子どもの食に合わせた供給量の調整等のおかげで、食がスムーズに進むことに対して感謝していた。園での食育活動を含む食生活支援はいずれも保護者には好評であり、保育所や認定こども園といった子どもが毎日生活する場における食生活支援は、日常の子どもの姿をよく知っている保育者や栄養士、調理員だからこそ継続して支援ができる環境でもある。

なお、日々の子どもの食事に関わる保育者らは、今後作成される幼児期の食生活支援ガイドに対し、子どもの咀嚼の段階や、歯の萌出の程度、食べ方等に合わせた、食材の大きさや固さの目安を示してほしいという意向を持っていた。日々の食事等を通して、子どもの発育・発達や健康状態および食の特徴を縦断的に確認しつつ継続的に支援することが可能な環境が整っている保育所や認定こども園等の保育・幼児教育施設での食生活支援は、非常に有効であると考えられる。

A. 研究目的

乳幼児期における栄養や食生活は、健やかな発育・発達のために大変重要であり、生涯の健康づくりの基盤となっている。近年、子ども達を取り巻く環境が変化し、食や栄養の状況についても大きく変わってきている。そのような中で、乳幼児期の子ども達の生活拠点となる保育所、幼稚園、認定こども園等における食生活や

食育のあり方は、子ども達の健康に大きく影響すると考えられるため、これまで、食育活動を積極的に行っている保育所、幼稚園、認定こども園等の施設を対象に調査を行った。その結果、日常の食事を重要視し、栄養士、調理員、保育者等が職種を超えた連携をすることで、子ども達の発育・発達や生育環境の特性に合わせた食の提供を行っていることや、子どもの主体性を

大切にした食の営みをすることで、食の悩みが解決している様子が明らかになっている。

そこで、本研究では、これまでの食育活動の好事例園での園長、栄養士、保育士等へのインタビューだけでなく、そうした好事例園に在籍する子どもの保護者へのインタビューをすることで、保育所や認定こども園等が行っている食に関する営みを、保護者側がどのように受け止めているかを明らかにし、食生活支援のあり方を双方向から検証することで、子ども達の食生活支援や保護者への子育て支援に資する栄養・食生活支援ガイドを作成するための基礎資料を得ることを目的とする。

B. 研究方法

(1) 保育所、認定こども園の園長、栄養士、保育者等へのインタビュー調査について

食育や生活習慣形成に関する実践や支援が積極的に行われている保育所、認定こども園を対象として、園長、栄養士、保育者等へのインタビュー調査を、平成 29、30 年度に引き続き実施した。調査実施期間は令和元年 9 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日である。

研究対象は、保育所 2 ヶ所、認定こども園 1 ヶ所の合計 3 園であり、各園の園長や保育者、栄養士等を対象に、合計 6 名にインタビュー調査（半構造化面接）を実施した。インタビュー項目は以下の項目である。

- 1) 食育あるいは健康増進活動として、どのような実践をしているか
- 2) 食への配慮、食事・間食の内容、食行動・生活習慣の実際（時間）、食環境などについて
- 3) 生活リズム（睡眠や遊び、運動排泄等との関連）
- 4) 食の供給体制（自園調理、アレルギーや除去食対応など）

- 5) 家庭との協力体制について、保護者へ情報提供や情報共有について
- 6) 活動の情報源
- 7) 問題意識（困っていること）、問題解決策
- 8) 施設形態、職員構成（職種、年齢）、保育時間など
- 9) 偏食への対応など
- 10) 幼児期の食生活支援ガイドに求めることなど

なお、今年度は特に、幼児期の食生活支援ガイドに求めることについても、詳細に尋ねることを試みた。

(2) 保育所、認定こども園に在籍する子どもの保護者へのインタビュー調査について

食育や生活習慣形成に関する実践や支援が積極的に行われている、これまで研究協力を得られた保育所、認定こども園のうち、保護者へのインタビュー調査が可能な保育所、認定こども園を対象として、保護者へのインタビュー調査を実施した。調査実施期間は令和 2 年 9 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日である。

研究対象は、保育所 1 か所（(1) の対象と同一園）、認定こども園 1 か所（(1) の対象と同一園）であり、保護者を対象に合計 5 名にインタビュー調査（半構造化面接）を実施した。インタビュー項目は以下の項目である。

- 1) 抱えている子どもの食の悩みについて
- 2) 通園している園の食の取組について
- 3) 通園している園の食の取組によって解決した食の悩みなどについて
- 4) 通園している園の食の取組に対する感想など

倫理面への配慮

調査にあたっては、事前に書面および口頭で研究趣旨や内容、方法を伝えた上で、同意の得られたものを対象とした。本研究の実施にあたり、玉川大学研究倫理審査委員会の承認を得た。(承認申請番号 TRE19-0001)

C. 研究結果

各保育所等における食生活支援に関するインタビュー調査結果は、以下の通りである。

1. H 保育園（東京都）（園長、主任保育士へのインタビュー）

(1) 園の概況

- ・ 私立：保育所（社会福祉法人）
- ・ 定員 121 名
- ・ 保育期間 産休明け～就学前
- ・ 開園時間（最長） 7:15～20:15
- ・ 職員構成 園長、保育士、栄養士、調理員、看護師
- ・ 食の供給体制：自園調理

1. 食育、健康増進活動の実践内容

(1) 食を中心においた環境づくり

保育園のコンセプトとして「昼間の大きなおうち」というものがあり、園内の真ん中にランチルームがある。調理室も窓ガラスが下の方まであるため、調理員が作っている姿も見え、子ども達もガラス越しに「おはよう」と声をかけるといふ姿も見られる。サンプルケースも乳児の目の高さにおいてあるため、お迎えの時に保護者と子どもとで今日の給食について会話をしている姿がよく見られる。

(2) 3 人一組の食事グループ

年少・年中・年長から各 1 人ずつ組み入れて 3 人一組の食事グループを毎年作っている。年

長の担任と主任と用務員がついて、年長がリーダーとなって配膳活動を行っている。年長児は、同じグループの年中児、年少児の食の状況も把握しており、「〇〇ちゃんはニンジンが多めに、きゅうりは 1 つにしてください」などと申請しながら配膳を行っている。3 人は年長児が真ん中に座り、食事のマナーなどについても、年長児があこがれの存在となっているようである。このようなシステムのおかげもあり、子ども達同士で励まし合ったり、お互い頑張ったりして、少しずつ好き嫌いも解消されていくようである。

またアレルギー児は、誤食防止のため、なるべく同じアレルギーのある子ども同士で食事グループを作るように工夫している。

(4) 「減らし皿」の存在

年長児が主導で配膳を行うため、量の加減がうまくいかないこともあり、「いただきます」の挨拶をする前に、真ん中に「減らし皿」とお箸を置いておき、どうしても減らさないと食べられそうにない場合には、大人に「〇〇を減らしてください」と申告して減らすことができるようにしている。この減らし方にもコツがあり、そこには必ず大人がつくので、子どもの様子を見ながら、食べられそうなタイミングの時にはうまく声かけすると、結果的には減らさなくても食べられることもある。

また、「減らし皿」は手を付ける前のものなので、おかわりをするときには、「減らし皿」にあるものから食べていくようにしている。

2. 栄養士・調理員と保育者との連携など

ランチルームでは、子どもと一緒に調理員、保育士だけでなく、用務員、事務員などもみんなで食事をしている。関わる大人が保育士だけではないため、調理員の前では甘えてみせる、

といった子どもの姿も見られる。ランチルームは、子どもにとってはいろいろな人と関わるきっかけの場所となっているとともに、職員にとっては子どもの様子を把握し、情報共有することで多職種連携につながる場所として機能している。

3. 生活リズム（睡眠や遊び、運動、排泄等との関連）

(1) 午睡は家庭の生活リズムからの引継ぎ

入園のときに、園での午睡の時間を決めて知らせるのではなく、家庭での生活リズムを引き継いで行くことを伝えている。保護者も子どもも、入園してからだんだん生活のリズムがついてくるので、それに伴い午睡の時間もだんだん変化してくる。そうした変化に対応できる環境づくりをしている。

そのためにも、いわゆる「トントンして寝かしつける」という発想をなくし、一人で寝られるように工夫している。子どもの「寝たい」時間帯を見極めてあげると、すぐに寝入るとのことである。

4. 家庭との協力体制、保護者への情報提供や情報共有

(1) 子どもがなじんでいる食具を園でも使用障がいがあってこだわりの強い子どもが、園のステンレスのスプーンの感触が嫌で食べられないため、保護者に相談したところ、家ではシリコンのスプーンを使っていることがわかった。それを借りて食べさせてみたら食べられたことから、園でも同じ食具を購入し、使うようにしている。

5. 幼児の食生活支援ガイドへの要望

(1) 食材の固さ・大きさなどの目安を知りたい

離乳食が完了すると、すぐに5歳児や大人が食べる食事と同じ食事になってしまっていたので、その間の段階を作ろうとしているとのことである。子どもの口腔機能との関連で、例えばどれくらい咀嚼できれば、どのくらいの大きさがよいのか、どのくらいの柔らかさがよいのか、といった目安がわかるとありがたい。

食欲のある子どもは、鶏の照り焼きなど、かなり大きめのサイズにして提供しても食べるのであげてしまうが、実は奥歯がまだ生えていないような状態だと、丸のみする子どもになってしまうこともある。サイズが大きくても、歯茎で取り込める柔らかさであれば問題ないというものもあるだろう。奥歯の萌出の度合いや、咀嚼などの口腔機能の発達による食材の大きさや固さの目安を示してもらいたい。

2. S 保育園（東京都）（保育者および保護者へのインタビュー）

(1) 園の概況

- ・私立：保育所（社会福祉法人）
- ・定員 162 名
- ・保育期間 産休明け～就学前
- ・開園時間（最長） 7:00～20:00
- ・職員構成 園長、保育士、栄養士、調理員、看護師
- ・食の供給体制：自園調理

(2) 調査結果

1. 食育、健康増進活動の実践内容

(1) 盛り付ける量の工夫

3, 4, 5歳児はランチルームで食事をしている。同じ料理でも、「多め」「普通」「少なめ」から盛り付けの量を選べるようにしている。子ども達はその日の体調をみながら自分自身で考えて量を選択できるようにしている。4月に

ランチルームを使い始める3歳児は、自分で量を選択することが難しいため保育者が働きかけをするが、4～5歳児になると自分の食べられる量もわかってくる。自分が決めた量に反して食べきれない場合は、無理に食べさせることはせず、自分でどうすればよかったかを考えられるように言葉がけしている。

(2) ランチルーム担当保育者の配置

ランチルーム担当の保育者(2歳児クラス兼任)がおり、一人一人の食べる量をすべて把握しているため、声掛けも適宜行っている。食の細かい子どもには、「次は少しの量にしてみよう」と声をかけ、なるべくみんなと同じ時間で食べ終わるようにすることで、まずは完食の達成感を感じられるようにしている。それが積み重なると、だんだん食べられる量も増えていく。

(3) 多くの大人からの声かけの工夫

好き嫌いの多い子どもでも、苦手なものも一口は食べるようにしている。苦手な食べ物がある子どもには、ランチルーム担当の保育者、担任、事務所の職員など、たくさんの大人が丁寧に声をかけることで、「頑張って食べてみようかな」という気持ちになり、少しでも食べられたときに「食べられたね」という言葉がけをしっかりしていくことで、徐々に食べられるようになっていく。

「大好きな先生にそばで見てもらっている」ということが苦手意識の克服には大きく影響する。

(4) 子ども達も一緒に手伝う給食の準備

給食の準備の手伝いとして、豆の皮むきや、トウモロコシの皮むきなど、子ども達もできる手伝いをしている。子ども達が食事作りの一環である食材準備に関わることで、「自分たちが

手伝った」特別な食材となり、食への興味・関心を深めることができる。

2. 保護者の食に関する悩みとそれに対する園側からの支援(保護者インタビューから)

(1) さまざまな食材、メニューの提供

家では苦手なものは細かく刻んで見た目にはわからないような形にして出すことが多いが、園ではそのままの形で提供されたり、家で作らないものが提供されたりするので、いろいろな食材(メニュー)を経験させてもらえることがありがたい。

また、家では食べない食材を、保育参加したときに、給食の時間におかわりまでして食べている姿を見て感動した。

(2) 給食メニューの展示で広がる親子の会話

毎日の給食のメニューが園の入り口に展示してあり、それをもとに子どもと会話ができる。

(3) 一人一人の子どもの食べるペースに合わせた保育者のかかわり

子どもの食べるペースがゆっくりなので、それに合わせて、子どもの気持ちに寄り添いながら保育者が接してくれているのがとてもありがたい。

(4) 離乳食を進める際の的確な指示

離乳食は、何をどのように進めてよいかわからなかったが、園で「次はこれを食べさせてみてください」と言ってもらえるので、その通り挑戦しながら進めることができ、本当に助かった。

3. 保護者の子どもの食に対する奮闘(保護者インタビューから)

(1) 子どもの興味関心とすり合わせる工夫

3歳児の保護者から。

幼児になると、自我がしっかりしている子どもの場合、自分から「食べてみよう」と思わないと、無理強いしても結局、苦手なものは食べられるようにはならないと感じている。ミニトマトが苦手な子どもが食べられるようになったのだが、そのときも、子どもの興味関心のあつたものと結び付けることで成功した。プリンセスが大好きな子どもに対して、ミニトマトを、プリンセスが身に着けている赤い宝石に見立て、皿にかわいく盛り付けしたところ、子どももミニトマトに興味を持った。「プリンセスの宝石みたい。1つママにちょうだい」といって、子どものお皿からミニトマトを、母親が子どもから一つもらって食べてみたところ、子どももおそろおそろ1つ食べてみるのができた。1つ食べてみたところで「おいしいかも」と言って、続けていくつか食べることができた。

3. A 子ども園（山形県）（園長、栄養士および保護者へのインタビュー）

（1）園の概況

- ・私立：幼保連携型認定子ども園（社会福祉法人）
- ・定員 120名
- ・保育期間 0歳～就学前
- ・開園時間（最長） 7:00～19:00
- ・職員構成 保育教諭、栄養士、調理員、その他
- ・食の供給体制：自園調理

（2）調査結果

1. 食育、健康増進活動の実践内容

（1）保護者会、孫親の会（祖父母の会）に支えられた栽培活動

園全体で、さまざまな栽培活動をしている。

田んぼづくりや畑づくりも行っているが、そのような栽培活動は、保護者会だけでなく孫親の会の協力を得ながら行っている。土地の提供も、米作りも、孫親の会の方に大いに支えられている。そして、保護者も孫親も「一緒に楽しむ」ことを大切にしている。

保育者は、子ども達と何を作りたいかを相談し、栽培して収穫し、食べるところまでの一連の体験ができるようにしている。

（2）食の循環も学びの一つに

馬（ポニー）を3頭飼っており、子ども達が馬に餌を食べさせることもある。馬の糞からできた堆肥を使って、畑で野菜を育てることもしており、子ども達は食の循環をも体感している。

（3）成長曲線を用いた食の支援

成長曲線を用いて、一人一人の食の状況と体重や身長推移をみながら、食に関する支援を行っている。離乳の時期が中心となるが、同月齢であっても子どもの食事量や食べられる固さが違うため、栄養士と保育士が連携して保護者と対話する時間を取り、保護者に確認してもらいながら、日々の食事量や固さを決めている。

（4）アレルギー児や病中病後児への対応

アレルギー児や、病中病後児に対しても、症状に合わせた適切な食事が提供できるよう、栄養士が中心となって対応をしている。

（5）地域交流で食知識を学ぶ

保幼小接続カリキュラムとして小学生との交流や職業体験の中学生と稲刈り体験、地域のリンゴ農園の方からリンゴ狩りへご招待を受けるなど、地域の方々との交流により、食材についての知識を学んでいる。

(6) お手伝いを通じた食への興味・関心

給食準備のお手伝いを通して、食材を身近に感じ、その特徴を理解することで、日々の生活の中で食事は生活の一部という意識が育つ。また、食べることを楽しむことや食べられなかった食材が食べられるようになるなど、食への興味・関心に繋がっている。

(7) ランチルームでの食事

「食事は楽しい」を基本と考え、ランチルームでの食事が楽しくできる空間づくりに配慮している。また、テーブルや椅子は木製を使用。暖炉を設置し、少人数で食事をしながら、お友だちと一緒に食べる楽しさを持てるようにしている。食事は、発達段階に合わせてビュッフェ形式を取り入れ、ごはんや汁物、おかずを自分でよそうことで、おたまやしゃもじ、トンゲなど道具の使い方や自分に合った量、盛り付けなどの仕方を学んでいる。

(8) 身近に自然がある環境

近隣の森へ行き、木や植物との触れ合いを通して、食育活動だけでなく、感じたことや思いを言語（俳句）・造形・身体などの豊かな表現活動に繋げている。

2. 保護者の食に関する悩みとそれに対する園側からの支援（保護者インタビューから）

(1) アレルギー対応の工夫

2歳児の保護者から。

1歳ぐらいに卵アレルギーが見つかり、除去食で対応している。園からの支援としては、食事内容について、見た目は他と同じようになるように配慮してもらっている。そのため、他の子どもとの食事が違うから食べないということはない。無理強いして食べるというのではなく、楽しい食事ができるよう、周囲の環境に配

慮してくれている。栄養面でも色々と考えていただき、成長にはあまり大きな影響が出ずにきている。

お迎えの際、担任の先生から、「今日はこんなものが出て、このように食べました。こんな食べ方だったから、このように工夫してみました」、「声かけしたら食べてくれました」等の報告がある。このように、子どもの近くにいる保育者や職員の方から親子に対して声かけをしていただき、日常的な会話の中で楽しく食べられるように配慮をしていただくことが、子どもの食べる意欲に繋がっている。

(2) 食への興味が持てるようなイベント

園では年長児が毎日米とぎをする。各クラスの畑で栽培もしている。また、畑で収穫したものに触れて自分たちでクッキングをしている。クラブ活動（紅花作りやずんだ餅作り等）もあり身近に食を感じられる機会が多い。

(3) 離乳食からのきめ細やかな対応

1歳2か月児の保護者から。

家では長い時間座って食べるというのがなかなか難しい。椅子に座って食べさせることを練習している段階である。家では白米を食べないが園だと食べる。咀嚼が苦手という悩みがある。特に肉や魚はずっと口の中で噛んでいてなかなか飲み込めない。

園ではみんなと座って食べており、離乳食をはじめた時期から保育者が色々工夫して食べさせてくれている。例えば、苦手なものを一口食べると「すごい、食べられたね」、「食べられた、やったー」といった声かけをしてくれるなど、前向きに励ましながら食べさせてくれている。また、ご飯とおかずを順番に食べさせてくれるので、園では白米も食べてくれる。食事の内容だけでなく、ほめて食べさせてくれるなど

の食べ方への配慮もあってありがたい。

3. 保護者の子どもの食に対する奮闘（保護者インタビューから）

(1) 食事にむらがある

2歳児の保護者から。

食事にむらがあり、日によって食べる日と食べない日がある。無理には食べさせてはいないが、白いご飯は必ず食べるため、白いご飯にふりかけやじゃこ等を混ぜるなどして食べさせている。またみそ汁だけは必ず摂るようにしている。

家ではむらがあるのに、園では残さず食べており、家で食べられないものを色々経験させてもらっていることが成長に繋がっているので感謝している。

D. 考察

1. 保護者からみた園での食育活動

平成 29, 30 年度の研究では、保育所・幼稚園・認定こども園等、園側からのインタビュー調査を実施し、園側の食育活動についてその共通重点事項を明らかにしてきたが、本研究においては園での食育実践の受け手側である保護者からの声を聞くことができた。

その結果、保護者は、日々の生活の中での保育者ら職員が行っている子どもの気持ちに寄り添った食事の声かけなどが、子どもの食を支えていると感じ、保育者ら職員に感謝している様子が明らかになった。また、家では食べない食材も園で経験させてもらえたり、離乳食を進めるにあたって園側からのサポートがあったりと、園側が供給する食の支援に対し、非常にありがたいと感じていることが明らかになった。

また、食について困ったことを、栄養士や調理員に相談できる環境がある場合、保育者以外

の職種による支援に対して非常に感謝している様子がうかがえた。

その他、園側が開催する食に関するイベントなどに対しても、大変好評であった。

2. 保育所や認定こども園等と保護者との協力関係が支える子どもの食

保護者によっては、子どもの食に関して困りごとがあり、奮闘努力している様子が伝わってきた。そうした困りごとがあっても、それを保育者や栄養士、調理員に相談できる環境が整っていることで、解決できることも多いことが明らかになった。それは、日常の子どもの姿をよく理解し、縦断的な発育・発達や健康状態を把握している保育者や栄養士、調理員だからこそ継続して支援ができる環境にあると考えられる。

平成 29 年告示の保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても、保育所や認定こども園の特色を生かした食育をより充実させていくことが謳われており、栄養士が配置されている場合は、専門性を生かした対応を図ることが追記されている。

保育者が子どもの心に寄り添う対応を心がけ、栄養士や調理員が食の専門家としてのアプローチをすることによる多職種連携ができれば、保育所や認定こども園での食生活支援は非常に有効であると考えられる。日々の食事の中で、一人一人の子どもに見合ったいろいろな方法を工夫しながら、子どもの様子を確認しつつ、継続的に支援することが可能な環境が整っている保育所や認定こども園等での食生活支援は、今後ますます期待されるであろう。

3. 保育者が求める幼児期の食生活支援ガイド

毎日の子ども達の食事を支える上で、保育者らは、子どもの咀嚼の段階や、歯の萌出の程度、

食べ方等に合わせた、食材の大きさや固さの目安を示してほしいという意向を持っていた。保育者の目線だけでなく、食の専門家からの情報も取り入れながら、子ども一人ひとりに合った食生活支援を行うことを求めている。

E. 結論

本研究では、平成 29、30 年度に引き続き、食育活動を積極的に行っている保育所等の好事例を報告した。と同時に、これまで研究協力が得られた保育所、認定こども園等の中から、保護者へのインタビュー調査が可能な園を抽出し、園での食育活動に対する保護者側の思いなどについても報告した。

すべての園で日々の食事において、子ども達の気持ちに寄り添う声かけを行うなど、子どもの気持ちを大切にしながら、好き嫌いが克服できるよう、また完食できるよう努めていた。と同時に、そうした日々の保育者ら職員の声かけに対し、保護者は感謝の気持ちを表していた。保護者によっては子どもの食に対し、奮闘努力しており、保護者の困り感に対して継続的に支援できる機能を持つ保育所や認定こども園における食育や支援活動は、乳幼児期の食生活支援にとって今後ますます重要な役割を果たすことが期待できるであろう。

また園での食事は家とは違う環境であることから、家では食べないものを園で食べる子どもの姿を見て、保護者は驚くとともに感謝の気持ちを示していた。園では、食事提供に関する専門的なスキルがあるだけでなく、集団の場で同年代の友達がおいしそうに食べている雰囲気があることも、子どもの食が進む要因の一つと考えられる。

園側が主催する食育活動は、いずれも保護者にとって影響力が大きく、家庭ではできない食育実践なども含め、園での食生活支援は、保護

者にとっても有効であることが示唆された。

今後、幼児期の食生活支援を進める上で、保育所や認定こども園といった保育・幼児教育施設が担う役割は大きく、保護者との双方向性がある食育活動が保護者支援にも有効であることが示唆された。

謝辞

本研究を進めるにあたり、ご助言を賜りました相模女子大学 堤ちはる教授および玉川大学 大豆生田啓友教授に感謝を申し上げます。また、本研究にご協力くださいました保育所、認定こども園の職員の方々に深謝いたします。

【参考文献】

- 1) 厚生労働省. 「楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～」2004.
- 2) 厚生労働省. 「保育所保育指針」2017.
- 3) 内閣府. 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」2017.

F. 研究発表

1. 学会発表

鈴木美枝子, 近藤洋子, 加藤則子, 仁藤喜久子.
保育と保健の融合—保育現場における多職種が連携した偏食への対応—. 小児保健研究, 第 78 巻, p. 126, 2019.
第 66 回日本小児保健協会学術集会 (東京), 2019. にて発表
(発表概要)

平成 30 年度のインタビュー調査内容から、保育所・幼稚園・認定こども園等における食育活動の好事例の中で、特に保育現場における多職種 (保育者、栄養士、調理員、看護師など) が連携して取り組んだ偏食への対応によって、子どもが偏食を解決していくプロセスについて、M-GTA の手法を取り入れて分析した結果、

以下の9つのカテゴリーを生成した。

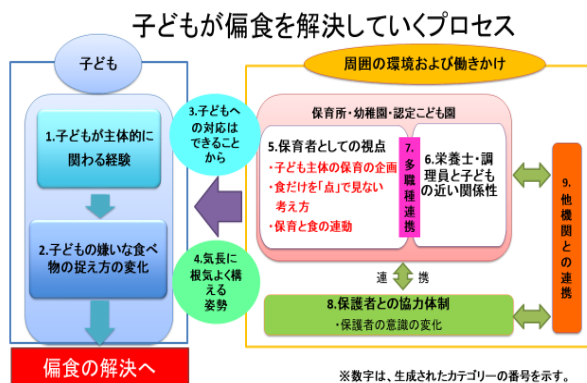


図 1. 保育所・幼稚園・認定こども園等において子どもが偏食を解決していくプロセス

図 1 にあるように、保育所・幼稚園・認定こども園等における食育活動の好事例の中で、子どもが偏食を解決していくプロセスは、「1. 子どもが主体的に関わる経験」をすることで、「2. 子どもの嫌いな食べ物のとらえ方の変化」が起これ、その結果偏食が解決することが示唆された。また子どもの周囲の環境や働きかけとしては「3. 子どもへの対応はできることから」「4. 気長に根気よく構える姿勢」が大切であり、無理強いをせず、子ども主体の保育の企画を行ったり、食を生活の一部と捉え「点」で見ない考え方をし、保育と食を連動させるといった「5. 保育者の視点」が重要となる。一方「6. 栄養士・調理員と子どもとの近い関係性」があることも重要であり、食の専門職である栄養士や調理員と子どもが顔の見える関係であることも共通項として抽出された。そして保育者や栄養士、調理員などとの「7. 多職種連携」がスムーズにいくことで、「8. 保護者との協力体制」が整えられ、また必要に応じて「9. 他機関との連携」も行われていることが抽出された。